

Title	中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について
Author(s)	小松, 翠
Citation	高等教育と学生支援 : お茶の水女子大学紀要
Issue Date	2016
URL	http://hdl.handle.net/10083/61454
Rights	
Resource Type	Departmental Bulletin Paper
Resource Version	publisher
Additional Information	

This document is downloaded at: 2017-11-19T12:30:45Z



Ochanomizu University

中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について

小松翠

お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所

The relationship between Chinese students' causal attribution toward dissatisfaction of their association with Japanese students

Midori KOMATSU

Ochanomizu University The Institute for Global Leadership

This research aims to examine the relationship between Chinese students' causal attribution toward dissatisfaction of their association with Japanese students. I conducted a questionnaire survey of 80 Chinese students and completed a statistical analysis of the data obtained. As a result of the examination, 4 factors 'familiarity', 'collectivistic advancement', 'authenticity', and 'openness, from Image of Japanese were found by factor analysis. The results suggested that Chinese students who attribute the cause to themselves and those who are relatively older are more likely to have familiarity image to Japanese, while that Chinese students who attribute the cause to Japanese students are more likely to have authenticity image to Japanese.

keywords : Image of Japanese, Causal attribution, Chinese students, Japanese students, Friendship, Dissatisfaction

研究の背景と問題の所在

グローバル化に伴い、世界の留学生数は増加傾向にあり（小松，2016）、日本においても大学等の高等教育機関に在籍する外国人留学生総数は2015年時点で15万2,062人となっている。そのうち中国人留学生は日本学生支援機構（2016）の最新調査によると、9万4,399人（段，2003；日本学生支援機構，2016）で、1987年から2015年までの間、出身国別で最多を占めており、今後も日本において中国人留学生数は高い水準で推移することが予測される。

こうした留学生の増加に伴い、国内外において留学生と受入れ側のホスト国住民との対人関係に焦点を当てた研究が蓄積されてきた（高井，1994；中野，2006；黄，2013）。そのうち、留学生の異文化適応に関する研究では、留学生にとってホスト国の人々との良好な関係が海外での生活に適応するため必要であることが示されている（Brislin，1981；Church，1982）。特に、留学生の日常的な生活の場である大学キャンパスにおいて接触するホスト国学生の友人の有無は、異文化適応の促進とかがわりが深い（田中，

1998；Pavel，2006；譚・渡邊・今野，2011；園田，2011；Menzies & Baron；2014）。

しかし、留学生とホスト国学生との友人関係は大学キャンパスにおいて構築されにくく、留学生の友人関係は同国出身者同士の関係に限定されやすいことが多くの研究により報告されている（Klein et al,1981；Kang,1974；Church，1982；Trice & Elliot,1993）。海外の研究では、Bochner，McLeod & Lin（1977）はアメリカの大学に所属するアジア系留学生を対象に友人関係の特徴について調査を行い、留学生が親友とみなしているのが同国出身の留学生である場合が43%、ホスト国学生である場合が29%、他国出身の留学生である場合が27%で、最も親友になりやすいのは同国出身の留学生であることを示している。また、Kang（1974）は、アメリカの大学に所属する台湾人留学生のうち67%以上が、アメリカ人学生よりも同国出身の留学生との友人関係のほうが良好だと認識していることを示している。さらに、Ying（2002）では、アメリカの大学に留学して14か月後の台湾人留学生を対象に友人ネットワークを調査し、留学生のうちの53%がほぼ同国出身の友人しか持っていない

ことが報告されている。Trice & Elliot (1993) においても、アメリカの大学で学ぶ日本人留学生のうち、アメリカ人学生と日常的活動を共にする者はわずか7%、学習活動を共にするものはわずか5%にとどまっております。大半の日本人留学生が同国出身の留学生と大学生活を過ごしていることが示されている。また、Pavel (2006) では、アメリカ人学生の81%が留学生よりもアメリカ人学生と友人関係を築いており、アメリカ人学生との関係のほうが重要だと認知している傾向が示されている。

また、国内の研究でも、概ね海外の研究と同様に留学生とホスト国である日本の学生の交流が円滑に進んでいないことが示されている。例えば、上原 (1998) では、留学生のうち学内に日本人学生の友人がいない者は48%、学内にも学外にも信頼できる日本人の友人がいない者は37%であることが報告されている。一方、横田・田中 (1992) は、留学生の友人ネットワークについて調査を行い、中国人留学生は対象者の留学生のうち最も同国人同士の付き合いが多く、友好関係が同国出身者に偏っていることを報告している。2000年代以降の研究では、石倉・吉岡 (2004) は、来日して留学生の半数近くが日本人学生と互いに家を訪問しあったり、何でも話したりできる関係に至っていないことを報告している。戦 (2007) においては、中国人留学生のうち6割以上が日本人学生との交流は個人的な問題には触れない挨拶程度にとどまっています。自国の友人同士のほうがより親しい関係を持っている傾向が示されている。つまり、異文化間の友人関係の構築は留学生の異文化適応上重要な問題であるが、実際にはホスト国の人々との関係が構築されにくいことが示唆されている。

先行研究と研究目的

原因帰属理論

帰属とは、ある行動や出来事から、人の属性や環境的特性などその行動や出来事を外的に規定している特性を推論することであり、帰属は人の感情や認識を規定する重要な要因となっている。(蘭・外山, 1991)。帰属の過程に関する研究である原因帰属理論を提唱したHeider (1958) によると、出来事の結果をどのように帰属するかは自己の能力や意思などの内的要因と状況や偶発性などの環境的外的要因の2要因の相互作用により決定される。Heider (1958) の原因帰属理論は、後続の原因帰属研究の中核的理論とされてお

り、例えば、Miller & Ross (1975) によると、人は自分の行動が成功した場合には、個人的要因に帰属しやすく、失敗した場合は、外的要因に原因を帰属させる傾向があり、これを自己奉仕バイアス (self-serving bias) という。また、Ross (1977) は、個人が他者の社会的行動の原因を推測する際、外的要因を十分に考慮せず内的要因に過度に帰属させるが、自身の原因を推測する際、外的要因に過度に帰属させる傾向を基本的な帰属の誤り (fundamental attribution error) として示した。

さらに、集団レベルでの原因帰属について、Pettigrew (1979) は、帰属判断における誤りが個人に対する判断だけでなく個人が属する集団全体に対する判断にも及ぶことを示唆した。つまり、自分が所属していない外集団の人々の好ましくない行動に関しては外集団の人々の態度や能力などの内的要因が原因とされやすく、好ましい行動については環境や状況などの外的要因が原因とされやすい。また、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1986) によると、人は肯定的なアイデンティティを得るために、内集団と外集団を明確に区別し、外集団よりも内集団の方が優れているとし、外集団に否定的な認知をする傾向がある。このような帰属の誤りやバイアスが生じる理由は、内集団の肯定的な印象を維持したり、偏見などの外集団の否定的な印象を形成・維持したりするためだと考えられている (Pettigrew, 1979)。

留学生の原因帰属に関する研究については、加賀美・大淵 (2004) が異文化間葛藤¹⁾の原因帰属と解決方略の関連について検討している。その結果、留学生は葛藤原因を教師要因に帰属させた場合、対決方略を選択し、学生要因に帰属させた場合、協調方略を用いていることが示された。また、文化要因に帰属した場合は、中国人学生は協調や服従など宥和的方略を用い、韓国学生は回避方略を用いない傾向が見られた。さらに、黄 (2013) では、中国人留学生がアルバイト先における被差別感についてその原因が日本人側にあると認識する場合、対決行動をとり、原因が自分自身にあると認識する場合、服従行動をとることが明らかにされている。

一方、留学生がホスト国学生との対人関係上の問題が自分自身にあると認識している場合もある。Kang (1974) は、アメリカに留学している中国人留学生のうち、英語の能力に自信がない者は、誤解されることを恐れるため、アメリカ人との相互交流をためらう傾向を指摘している。Barker, Child, Gallois, Jones &

Callan (1991) は、オーストラリアのアジア人留学生は、言語面に困難があると認知する場合に、チューターや研究のアシスタントとの関係を積極的に構築しようとしないうことを述べている。これらのことから、留学生がホスト国住民に対して否定的な認識を持っていたり、留学生自身の言語上の能力が不足しており自分自身に対人関係上の問題の原因があると認知したりするために対人関係が構築されない傾向が示されている。以上より、留学生が否定的な出来事を経験した際に、外的、内的要因など、どのような要因に原因を帰属させるかということが留学生の次の行動やホスト国とホスト国の人々への認識に影響を与えることが推測できる。

日本・日本人イメージ

前述のように、留学生はホスト国の人々との交流において否定的な経験をした際にどのように原因をとらえるのかということは、留学生のホスト国の人々に対する認識や対人関係に影響をもたらしている。Pavel (2006) は、留学生とホスト国学生の交流上の障害および交流相手の友人形成への努力に関する認知と友人形成の関連を検討している。その結果として、アメリカに滞在する留学生は、留学生自身が交流における障害を認知し、障害を乗り越えようと努力しており、アメリカ人学生側も同様に障害を克服するために努力していると認知する者ほど、アメリカ人学生の友人との関係に満足する傾向が示された。一方、Brown (2009) では、イギリスにおいて、実際にホスト国の学生が留学生を否定的に認識していなくても、留学生はホスト国から疎外されていると感じていることが報告されている。国内の研究においても類似する問題が挙げられている。例えば、留学生がホスト国において偏見や差別を敏感に感じ、日本人との接触到に萎縮してしまうこと(中野, 2006)が指摘されている。また、柴田(2009)は留学生が感じる日本人学生側の問題として、排他的に映る態度や偏見を挙げている。これらの研究からは、留学生のホスト国やホスト国住民に対する否定的な認識が示唆されている。

さらに、日本に滞在している留学生は日本や日本人住民に対してどのようなイメージ²を持つのか、様々な観点から研究が蓄積されている。対日イメージの研究では、社会、文化、政治、外交、経済、風土、歴史、科学技術など日本全体に関するイメージや日本人への感情や印象、日本人の認識など日本人一般に関するイメージが調査されている(劉, 1998; 葛, 2007; 加

賀美, 2013)。日本イメージの研究には、日本イメージと日本人イメージを区別せず統合的に検討した研究と、日本人イメージのみを分析対象とした研究がある。これは、イメージは人の過去の体験のなかで心の中に作られ、蓄えられており、人は必要に応じて心のなかから複数のイメージを取り出し合成・比較し操作している(中沢, 1979)ため、分析対象を日本イメージとした場合、日本と日本人へのイメージの両方が区分されずに抽出されることがあるからだと考えられる。

留学生の日本・日本人イメージについては出身地域により異なる傾向が示されている。留学生の日本人イメージの先駆的研究である岩男・荻原(1988)では、留学生の出身地域による日本人イメージの差異について、「親和性」に関するイメージは、欧米系留学生のほうがアジア系留学生より高いこと、「先進性」に関してはアジア系のほうが欧米系留学生より高いこと、「勤勉性」「信頼性」に関しては差異がないことが示された。また、佐々木(1996)は、日本人に対するポジティブなイメージとして、中国人留学生と韓国人留学生に共通し「きれいな」「まじめな」「礼儀正しい」というイメージがあり、ネガティブなイメージとして共通し「はつきりものを言わない」「形式ばった」「けちな」というイメージがあることを示している。

2000年代以降の研究としては、安(2010)は、韓国人留学生、台湾人留学生、中国人留学生に共通した日本人や日本社会へのイメージとして、親切で礼儀正しい、ルール順守、仕事熱心、親切だが冷たい印象、外国人への特別視の5つを挙げている。同研究によると、台湾人留学生と中国人留学生に共通した対日イメージは、日本の技術や製品についてであり、韓国人留学生と中国人留学生に共通した対日観は、性に対する開放性であることが示された。加賀美(2013)では、韓国と台湾の小学生・中学生・高校生・大学生を対象に質問紙調査や九分割統合絵画法で日本イメージを検討している。質問紙調査については、SD法により日本イメージを示す形容詞について回答を求めた結果、韓国では「親和性」「集団主義的先進性」「開放性」「強さ」、台湾では「温厚さ」「先進的影響力」「信頼性」「近接性」の因子が得られ、全体的に台湾のほうが肯定的イメージ構造である傾向がみられた。また、九分割統合絵画法を用いた分析では、韓国と台湾に共通し、日本統治による過去の歴史的経緯に影響を受けたイメージと日本の現代的な大衆的イメージがみられ、そこには否定と肯定が混じったアンビバレントな感情

³が示されていた。また、韓国と台湾の小・中・高・大学生の共通点として小学校の時期は知識が少なく未分化と言え、中学校の時期が分水嶺で、韓国は否定的イメージを、台湾は肯定的イメージを形成させ、その後、高校生・大学生の時期にイメージを定着させていた。さらに、加賀美・守谷・岩井（2014）は、韓国の20代の日本語上級話者の日本イメージについて調査し、日本人や日本文化との積極的な接触経験を持つ対象者には、日本社会や日本人の内面に踏み込んだ多様な日本イメージの側面が見られることを示した。また、アンビバレントな感情については、大衆文化による肯定的イメージに、歴史教育による否定的イメージが付加され、対象者の内面に両者が混在している様相が示された。また、田中・岡村・加賀美（2015）では、台湾出身日本語上級話者の日本イメージについて調査し、日本社会と日本人気質について好意的理解と違和感、人間関係の重視と困難などそれぞれ肯定・否定の相反するイメージが示され、所属・立場別に交換留学生（学部生）の肯定的イメージが最も高く、ついで大学院生であり、社会人の肯定的イメージが最も低いことが示された。

次に、中国人・中国人留学生を対象とした調査に関しては、まず、歴史教育と日本イメージの関連についての研究がなされている。宮脇・姚（2005）の研究では、日本の中国侵略の歴史認識が、植民地体験者および戦後の教育を受けた中国人の対日観形成に影響を与えていることが示されている。同研究によると、戦後教育を受けた人では「日中関係史」について学校で学んだことの中で、「日本が中国を侵略し、中国人に多大な損害・苦痛・屈辱を与えた」と認識する人が89%、「軍事（政治）侵略だけでなく経済侵略・文化侵略を行った」と認識する人が67%に上った。さらに、7割以上が『民衆殺害』『婦女子凌辱』『略奪』行為について、家庭や学校で聞かされている。また、鄭（2008）は中国の歴史教科書では、日本の中国侵略と残虐な行為についての記述が多く、戦後の日中関係についての記述が欠落しているため、中国人の否定的な日本観が形成される傾向を明らかにしている。こうした歴史教育が日本に対する負のイメージを形成する背景要因になっていることが考えられる。一方、黄・小松・加賀美（2014）では中国人留学生の領土問題に関する日本イメージについて検討し、日本人と中国人に対して肯定・否定の両面を持ち合わせる二律背反的な認識を持っている傾向が示された。

さらに、中国人留学生の日本イメージとマスメディ

アの影響についても研究が蓄積されている。楊・橋元（2010）では、中国の戦争映画等において以前から形成された日本人のマイナスイメージが依然として残る点を示している。同研究によると、中国の若い世代の間で普及しているインターネット上では、日本のアニメーションに関する情報提供が多くされており、日本のアニメーションへの興味と好感に関する書き込みが多いが、現実社会では日本文化好きということを公的に言いづらいという認識があることが示唆されている。また、李（2005）は中国人留学生が来日後に持つ日本イメージについて、日本人との直接接触を持つことができない中国人留学生の場合、日本イメージは日本国内におけるテレビやインターネット等のマスメディアとの接触により補填され、形成されることを示している。

さらに、留学生の留学経験と日本イメージについては、萩原・岩男（1988）の調査が先駆的研究として挙げられる。同研究では、留学生の日本イメージとして「親和性」「勤勉性」「信頼性」「先進性」の4つが見いだされ、留学経験によって「信頼性」と「勤勉性」のイメージは強まるが「親和性」のイメージが低下していることが示されている。また、萩原・岩男（1988）の調査から15年後の2000年の、葛（2007）の研究では、日本イメージとして「親和性」「勤勉性」「先進性」の3つが見出され、留学3ヶ月後に日本に対する「勤勉性」「先進性」の評価が低下していることが示された。葛（2007）は、その原因を中国人留学生は留学前、期待が膨らみイメージが高くなるが、留学後、抱いていたイメージがより現実的に修正され、カルチャー・ショックにより低下していくからだと推測している。また、劉（1998）では、日本留学帰国者を対象とし、留学前後の対日好感度の変化について調査している。その結果、「日本が好きになった」が61%であるのに対し、「日本人が好きになった」は二分の一程度の35%であった。さらに、「日本が前より嫌いになった」がわずか4%であったのに対し、「日本人が前より嫌いになった」は約3倍の13%であった。一方、李（2005）の中国人留学生を対象としたインタビュー調査では、歴史的負の遺産に由来する「好戦的」「残忍」などのマイナスイメージがほとんど語られなかったが、日本人男性に対するイメージと日本人女性に対するイメージに差異がみられ、日本人女性に対するイメージのほうが「優しい」「善良」など肯定的イメージが語られた。

また、留学生の日本語能力と日本人イメージの関連

については、荻原・岩男（1988）では、日本語力の乏しい留学生ほど、「親和性」を高く評価しており、日本語力の低い留学生ほど「先進性」を低く評価している結果が出ている。一方、中国人留学生を対象とした葛（2007）では、ポジティブ群は来日前に日本語を学習しており、ネガティブ群は未習であった。

さらに、留学生の日本人との対人関係と日本イメージの関連については、葛（2007）の研究では、「親和性」への評価が高いほど対日感情がポジティブで、対人関係がうまくいくこと、勤勉性を高く評価するほど対日感情がネガティブになり日本語によるコミュニケーションや対人関係に問題を感じることを示されている。同研究では、日本での生活体験やファッションやドラマなど日本の大衆文化、中国に興味のある日本人の友人との交流による日本に対する好感がみられる一方で、歴史問題に対する不信感の葛藤がみられた。また、鄭（2008）は中国人留学生の来日前の対日観について調査し、来日前に日本人との接触が多いほど、肯定的イメージが多いが、来日前に日本人との接触が余りない場合は否定的イメージや中立的イメージが多い傾向を示した。

近年の研究では、加賀美・朴・岡村・小松（2015）および加賀美・黄・小松（2016）では、日本イメージと国民意識と年代との関連が示されている。加賀美他（2015）では、韓国の国民意識と日本イメージの関連について、国家的優越性を重視する人は、日本の攻撃性が高いというイメージを持ち、外国への開放という国民意識を重視する人は日本の規則順守、科学技術における先進性が高いと認識している傾向が示された。また、「災害・社会問題の深刻化」の日本イメージは年代が上がるにつれ高くなり、「信頼性」は14歳から20歳までが低く、25歳から29歳以降は高くなる傾向が認められた。一方、加賀美他（2016）では、台湾の日本イメージと国民意識について、国民意識の『外国に対する開放性』が、『集団主義的先進性』『自己表現の抑制』『自然災害』『独自性重視』の日本イメージに共通して影響を与えていた。年代間比較では『親和的開放性』は20代が最も高く40代が最も低く、『攻撃性』および『頻発する自然災害』のイメージは年代が高いほうが持ちやすかった。

このように、留学生を対象とした日本イメージの研究では、歴史教育、マスメディア、日本での留学経験、日本人との対人関係、日本語能力、国民意識、年代などが日本イメージ形成に影響していることが先行研究によって示されている。

留学生の友人関係に関する原因帰属と日本・日本人イメージの関連

留学生がホスト住民との対人関係や友人としての付き合いについて原因帰属をどのように行い、それが日本イメージとどのように関連しているのかということについて検討を行った研究は管見の限り見当たらないが、関連する研究として、留学生が日本人から差別的な態度や行動をとられたと認識する場合に、日本イメージにどのような影響があるのか検討が行われている。福田・森（1996）は、中国人留学生は差別経験がある場合、「友好的」「あたたかい」「誠実」など日本人の人格や倫理感のイメージが低く、日本人をネガティブに評価することを示した。また、李（2005）の研究においても同様に中国人留学生が差別を経験することで日本人をネガティブに評価する結果が出ている。さらに、先述の葛（2007）では、留学生の友人関係と日本イメージの関連について、来日後、日本イメージが上昇したポジティブ群は、生活や勉強等で友人関係を楽しみ、ホスト国の友人との交流を積極的に評価していたが、日本イメージが下降したネガティブ群は、友人の数が少なく、付き合いにくさを感じていたことが示された。また、李（2005）では、日本人の友人が多く、付き合いが深い留学生ほど、日本人について「親切」「信頼できる」「礼儀正しい」「素質が高い」「人情的」などプラスイメージが見いだされている。以上のことから、留学生が友好的な関係を形成している場合には、日本人イメージはポジティブなものになるが、友人関係が形成できなかつたり、否定的な出来事を体験している場合には、日本や日本人イメージはネガティブなものになることが示唆されている。このことから、留学生が友人関係に関する不満をどのように原因帰属させるのかということが日本人イメージに影響を与えていることが推測できる。

研究目的

小松（2013a）は、留学生と日本人学生の交流において、留学生が否定的な認識をし、友人関係に不満を持つ場合にどのように原因を帰属させるのか検討した。その結果、友人関係への不満の原因帰属として、人的内的要因、人的外的要因、社会的外的要因の因子が抽出された（付録参照）。また、交流不全感を感じる留学生は友人関係に対する不満の原因を大学の環境などの社会的外的要因に、被差別感が少なく学年の低

Table 1 分析対象者の属性

性別	男性33名／女性38名
年齢	20歳～25歳29名／25歳～30歳41名／30歳以上1名
国立・私立	国立12名／私立59名
在籍課程	学部生64名／修士7名
日本滞在期間	1年未満6名／1年～3年25名／3年～5年31名／5年以上9名

い留学生は留学生自身の努力不足など人的内的要因に、被差別感が強い留学生は日本人学生の交流への消極性などの人的外的要因に原因を帰属させる傾向が示された。このことから、友人関係に関する体験の否定的認識がどのような認識であるかということにより、友人関係不満に関する原因帰属の仕方が異なる傾向が認められた。しかし、留学生の日本人学生との個別の友人関係に関する不満の原因帰属の仕方が日本人全体のイメージにどのような影響を及ぼすのかということについては検討されていない。そこで、本研究では、中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連についてについて検討を行う。

方法

調査時期・調査手続き

質問紙の作成については、2008年3月、日本の大学または大学院に所属している留学生18名に対して半構造化インタビューを実施し、日本人学生との接触や交流等について自由に語ってもらった。そこで得られた意見について、KJ法(川喜多, 1982)を援用し、分類したものをもとに、先行研究からの知見と併せて質問項目を作成した。その後、予備調査を行い質問紙の再調整を行った。質問項目は「友人関係満足度」1項目、「友人関係への不満の原因帰属」9項目⁴、「日本人イメージ」19項目⁵、「フェイスシート」から構成される。また、「友人関係満足度」において、周りの日本人学生との友人関係にどの程度満足しているか、「とても満足している(5)」～「まったく満足していない(1)」までの5段階評定によりあてはまる程度をたずね、「あまり満足していない(2)」および「まったく満足していない(1)」の2項目に回答した対象者は「友人関係への不満に関する原因帰属」の質問項目に回答するよう指示文を設けた。「友人関係への不満に関する原因帰属」は友人関係への不満の原因は何にあると思うか、あてはまる程度をたずね、「とても当てはまる(5)」～「まったく当てはまらない(1)」までの5段階評定を用いて回答を求めた。「日本人イメージ」については岩男・荻原(1988)および加賀

美(2013)を参考に日本の様相を表すと考えられる19対の形容詞項目を挙げ、SD法により一般的に日本人のイメージについてあてはまる程度をたずね、「どちらともいえない(0)」～「非常にあてはまる(±2)」までの5段階評定を用いて回答を求めた。翻訳に関しては、日本語版を作成した後、バックトランスレーション法による翻訳を行い、中国語版を作成した。

質問紙調査は、2008年9月から10月にかけて、留学生教育関係者および留学生を通して、日本の大学・大学院に所属する留学生に質問紙を配布し、調査を実施した。

結果

質問紙の回収結果・分析対象者

質問紙の回収率は83%で、回答に著しく不備があったものを除いた結果、有効回答数は119部となった。このうち、「友人関係満足度」において、友人関係への不満を示す「あまり満足していない」および「まったく満足していない」の2項目を回答した「友人関係不満」の71名を対象に統計的分析を行った。対象者の属性は以下の通りである(Table1)。

「日本人イメージ」の因子分析結果

「日本人イメージ」の構造を把握するため、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷が低い項目(.35以下)や複数の因子にまたがって高い項目を削除した結果、4因子が抽出された。第1因子は「正直な」、「好き」などの7項目から構成されるため『親和性』と命名した。第2因子は「集団の結束力が強い」「規則を厳格に守る」などの日本人の3項目から構成されるため『集団主義的先進性』と命名した。第3因子は、「自己主張が強い」「自由な」などの3項目から構成され『開放性』と命名した。第4因子は「権威主義的な」「理解しにくい」などの3項目から構成されるため『権威性』と命名した(Table2)。

「友人関係不満の原因帰属」と「日本人イメージ」の関連についての結果と考察

Table 2 日本人イメージの因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	
第1因子 親和性($\alpha=.852$)					
正直な	0.847	-0.089	-0.016	0.04	
好き	0.792	-0.127	-0.058	-0.14	
安全な	0.605	0.268	0.003	-0.028	
穏やかな	0.573	0.074	0.072	-0.013	
親切的な	0.570	で	0.166	-0.019	
信頼できる	0.525	0.195	0.064	0.13	
あたたかい	0.515	-0.015	-0.029	0.204	
第2因子 集団主義的先進性($\alpha=.703$)					
集団の結束力が強い	-0.063	0.873	-0.027	-0.091	
規則を厳格に守る	0.268	0.643	-0.188	-0.036	
勤勉	-0.061	0.520	0.269	0.15	
第3因子 開放性($\alpha=.686$)					
自己主張が強い	-0.155	0.211	0.727	0.004	
自由な	0.186	-0.169	0.715	-0.216	
男女平等な	0.058	-0.120	0.528	0.19	
第4因子 権威性($\alpha=.657$)					
権威主義的な	0.027	-0.174	0.071	0.647	
理解しにくい	0.110	-0.060	-0.088	0.614	
親しみにくい	-0.129	0.180	-0.098	0.486	
	因子相関行列	I	II	III	IV
	I	—	0.128	0.093	0.085
	II		—	0.069	0.047
	III			—	0.010
	IV				—

「友人関係不満の原因帰属」については、先述の小松（2013a）で抽出された『社会的外的要因』、『人的内的要因』、『人的外的要因』の3因子を用いた。「友人関係不満の原因帰属」と「日本人イメージ」の関連を明らかにするため、「友人関係不満の原因帰属」および「年齢」を説明変数、「日本人イメージ」を基準変数とする強制投入法による重回帰分析を行った（Table 3）。その結果、『親和性』に有意な影響を及ぼす変数は『人的内的要因』および『年齢』で、友人関係への不満の原因を留学生自身に帰属させ、年齢が低い場合、日本人に対して親和的なイメージを持つ傾向が示された。また、『権威性』に有意な影響を及ぼす変数は『人的外的要因』で、友人関係への不満の原因を日本人学生側に帰属させる場合、日本人に対して権威的なイメージを持つ傾向が示された。なお、『集団主義的先進性』『開放性』に関しては、有意差が認められなかった。以上より、中国人留学生の友人関係への不満の原因帰属と日本人イメージの関連が示された。

結果のまとめと考察

友人関係への不満の原因帰属と日本人イメージの関連について本研究から得られた知見について述べる。まず、『親和性』に「人的内的要因」および「年齢」が影響を及ぼした結果に関しては、自身の個人的要因に原因を帰属させる場合、日本人に対する友好的な態度である親和性のイメージを持つ傾向が示された。これは、先述の加賀美・大淵（2004）において示されている中国人学生が葛藤の原因を個人的要因に帰属させる場合に対立方略が選択されにくいという傾向と類似する結果である。友人関係への不満の原因が自己要因であると考えられる場合は、今後努力することで、状況が改善されるのだと認識している可能性があり、日本人に対するイメージが低下しないことが推測される。また、年齢については、石原（2011）では、出身地域に対しての関心を一方的に求め、年齢が高い中国人留学生の場合、その留学生は被差別感を感じやすい傾向が示されている。本研究で得られた結果からは、年齢が低い中国人留学生の場合、日本人学生との交流経験が浅いために、自身の置かれている状況に対し楽観的な考えを持っていることが推測できる。田中・岡

Table3 「友人関係不満の原因帰属」を説明変数「日本人イメージ」を基準変数とした重回帰分析の結果

説明変数	基準変数			
	親和性	集団主義的 先進性	開放性	権威性
留学生側要因	0.392**	-0.083	0.195	0.006
社会的外的要因	0.208	-0.035	0.027	-0.095
日本人側側要因	0.001	0.066	0.188	0.454***
年齢	-0.236*	-0.098	-0.028	0.176
R ² 決定係数	0.275***	0.021	0.103	0.233**

***p<.001 **p<.01 *p<.05(数値は標準偏回帰係数)

村・加賀美(2015)においても、日本における台湾出身者の日本イメージについて、所属・立場による分析を行い、交換留学生(学部生)の肯定的日本イメージが最も高く、次いで大学院生であり、社会人の肯定的日本イメージが最も低いことが示されている。こうしたことから、低年齢で日本人に対して親和的な認識を持つ中国人留学生も様々な交流経験を積むうちに日本人への肯定的なイメージが否定的なイメージへと傾斜してしまうことも推測しうる。

次に、『権威性』に「人的外的要因」が影響を及ぼした結果について考察する。この結果からは、友人関係に関する不満の原因を日本人側に帰属させる場合は、日本人に対する支配的な態度である権威性のイメージを持つことが示された。これは、先述の自己奉仕バイアスや社会的アイデンティティ理論で述べられている外集団への否定的態度の形成を支持する結果である。中国人留学生が友人関係に関して不満を持ち、相手集団側に原因を帰属させる場合には、相手集団に否定的な態度を持つことにより自己肯定感を保ったり、メンタルヘルスの低下を防いだりしていることが考えられる。また、友人関係において留学生自身が努力をして問題を改善したり困難を克服する意思がなかったり、これ以上交流することを諦めてしまい無力さを感じているために、日本人の権威性を強く感じていることも考えられる。さらに、権威性は、過去の戦争における日本人の植民地支配における権威者としてのイメージに関連していることも推測できる。加賀美(2004)では、日本人教師と外国人学生の葛藤場面において、葛藤原因を教師要因に帰属し対決方略を選択した留学生は日本人教師を外集団とみなし異文化の権威者として同化を強いていると感じた可能性があると解釈している(加賀美, 2007)。本研究の対象者である中国人留学生は友人関係における否定的な出来事が生じた際に、その原因が日本人や日本人学生側にあると感じる場合、過去の歴史から日本人に対する権威者

としてのイメージが想起される可能性が示唆された。このような日本人に対する認識を持つとき、中国人留学生は日本社会において孤立した存在となり、留学生が日本人と対峙していくことになると考えられる。

これらのことから、今後は、上述の結果を生かして大学キャンパスにおいて中国人留学生が、日本人学生や日本人との豊かな交流経験が積めるような機会を提供し、肯定的なイメージを維持し否定的なイメージを改善していくような教育や支援が重要であろう。解決策としては、例えば、加賀美(2001;2006)、小松(2015)などにおいては、留学生の友人形成を促進させるためには、一時的に不可避な異文化接触を設定し、組織と個人を刺激し学生の意識の変容を試みる行為である教育的介入が有効であることが示されている。教育的介入の具体例としては、アジア諸国の留学生と日本人学生を対象とした異文化理解プログラムが開発され、実施されている(加賀美・守谷・朴・岡村・村越・夏, 2013)。これは、フィールドワークなどで構成される異文化理解プログラムへの参加後に、参加者自身が教育プログラムの開発を行う実践で、プログラム参加者は、アジア地域の過去の文化交流の歴史文化の融合性への気づき、多角的視点の獲得、理解の深化、既存の世界遺産・文化財観から新たな価値観への変化などの学びを得ており、教育的介入の効果が実証されている。また、小松(2013b)においても、中国人留学生の友人形成を促進する一因として大学の制度的支援を挙げられている。こうした大学側の交流支援を拡張し継続するとともに、留学生教育に携わる支援者や教員は異文化滞在者がホスト社会に対して持つ外集団へのバイアスや否定的な認識を知ることが重要であろう。また、東アジア圏の留学生特有の歴史認識やアンビバレントな感情への理解や配慮も必要だと考える。黄・小松・加賀美(2014)では、中国人留学生が日中間に領土問題が生じた際に、日中の外交関係の悪化や戦争、日本人との関係悪化に対して不安を抱く

こと、その不安により、領土問題について日本人と話すことを回避する傾向が示されている。中国人留学生は領土問題など過去の歴史に結び付く出来事が生じる際、日本での日本人との交流に困難を抱え苦しい立場に置かれていると考えられる。こうしたことに対して、大学の教員や交流支援者のみではなく日本社会全体が留学生や在日外国人の立場に配慮できる態度が必要だと考えられる。また、中国人留学生自身には、対人関係上の問題や葛藤を客観的にみつめ、日本人との交流に関する問題を留学生自身にある原因、日本人側の原因、環境的障壁など多角的に判断することや、交流上の困難を乗り越えるためのさらなる努力や積極性(小松, 2013b)が必要とされる。また、こうした客観的な判断や努力は留学生と日本人学生の友人関係構築において、日本人学生側にも同様に必要とされることであろう。

今後の課題は、留学生の来日直後、在学中、卒業後など縦断的に日本人イメージの変化を検討することである。また、本研究は中国人留学生を対象としたが、今後は、文化圏が異なる国・地域の留学生など、多様な留学生を対象とした調査を行い、本研究の結果と比較したい。そのことで、本研究では十分に検討が行えなかった中国人留学生特有の傾向についてより詳細な検討を行えると考えられる。加えて、加賀美他(2015; 2016)で示された国民意識等と日本イメージの関連について、留学生のみではなく中国人の幅広い年代を対象に調査したい。さらに、日本人学生を対象とし、留学生との友人関係の不満の原因帰属や中国および外国に対するイメージについて検討したい。なお、ホスト国の学生は、留学志向や留学経験のある場合とそうでない場合、海外の文化や留学生との交流に関心がある場合とそうでない場合などさまざまなケースにより傾向が異なることが推測されるため、日本人学生を対象とした分析については、属性ごとに分析を行いたい。

注

*1. 異文化間葛藤とは、内容、アイデンティティ、関係的問題、手続き的問題において、価値観、規範、過程、目標が集団間で相反すると知覚された状態のこと(Ting-Toomey, 1998)で、一方が適切と思って行う行動が他方にとっては我慢出来ないものと知覚されることである(加賀美, 2007)。

*2. 中沢(1979)によると、イメージとは、心のなかに

つくる心像のことである。一方、御堂岡(1992)はイメージを「それが指し示す対象についての知覚された諸特性で、その対象がどのようなものかということについての個人が持つ概念」と定義している。また、イメージの概念は、態度、意見、偏見、ステレオタイプといった態度変数と知識を含み、別の文化集団の文化、成員について持つイメージの複合体が、その文化集団についての理解の仕方につながることを指摘している。つまり、イメージは個人の体験により形成されるものであり、外集団の文化や外集団に属する人々に関するイメージは、その集団に対する態度や認識に関連するといえる。

*3. アンビバレントな感情とは、日本の大衆文化や先進性に対して憧れや興味を示しつつ、過去の戦争や植民地支配の歴史から否定的感情を持つことである。

*4. 「友人関係への不満の原因帰属」の質問項目9項目の内容は、「自分が努力しなかったから」、「相手が努力しなかったから」、「自分が積極的ではないから」、「相手が積極的ではないから」、「自分の相手に対する態度が良くないから」、「相手の自分に対する態度が良くないから」、「周囲の環境が良くないから」、「たまたまそうであったから」、「文化が違うから」である。

*5. 「日本人イメージ」の質問項目(形容詞対)19項目の内容は、「規則を厳格に守る－規則を厳格に守らない」「科学技術が進んでいる－科学技術が進んでいない」「集団の結束力が強い－集団の結束力が弱い」「親しみにくい－親しみやすい」「自由な－不自由な」「明るい－暗い」「穏やかな－攻撃的な」「理解しにくい－理解しやすい」「あたたかい－冷たい」「権威主義的な－自由主義的な」「男女平等な－男女不平等な」「強い－弱い」「好き－きらい」「正直な－正直でない」「信頼できる－信頼できない」「安全な－危険な」「親切な－不親切な」「勤勉－怠け者」「自己主張が強い－自己主張が弱い」である。

参考文献

安龍洙(2010)「外国人の対日観に関する研究－中国人非正規留学生の場合－」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17.

Barker, M, Child, C, Gallois, C, Jones, E & Callan, V. J(1991) Difficulties of Overseas Students in Social and Academic Situations. *Australian Journal of Psychology*. 43(2), 79-84.

Bochner, S., McLeod, B.M. & Lin, A. (1977) Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*. 12(4), 277-294.

Brown, L. (2009) A Failure of Communication on the Cross-Cultural Campus, *Journal of Studies in*

- International Education,13(4),439-454.
- Church,T.A. (1982) Sojourner Adjustment. Psychological Bulletin.91(3),540 - 572.
- 福田充・森康俊 (1996)「4章 各種変数と日本人イメージの関連 4.1 対人関係と日本イメージ」見城武秀・橋元良明・堀誉子美・小川葉子・小田切由香子・土井みつる・岡野一郎・笹川洋子・佐々木由美・松田美佐・辻大介・福田充・森康俊・北田暁大「中国人留学生・韓国人留学生・日本人学生のもつく日本人イメージ」比較—イメージおよびメタ・イメージにおけるギャップを中心に—『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』8,265-275.
- Heider,F(1958) The Psychology of Interpersonal Relationship. Wiley.
- 段躍中 (2003)「現代中国人の日本留学」明石書店.
- 石倉健二・吉岡久美子 (2004)「大学生活における心身の健康に関する調査 - 留学生と日本人学生の適応とヘルパ - 志向性 -」『長崎国際大学論叢』4, 225 - 232.
- 石原翠 (2011)「留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連—中国人留学生の場合—」『異文化間教育』34,136-150.
- 岩男寿美子・荻原滋 (1988)「日本で学ぶ留学生 社会心理学的分析」勁草書房.
- 加賀美常美代 (2001)「留学生と日本人学生のための異文化間交流の教育的介入の意義 - 大学内および地域社会に向けた異文化理解講座の企画と実践 -」『三重大学留学生センター - 紀要』3,41-53.
- 加賀美常美代・大淵憲一 (2004)「日本語教育場面における日本人教師と中国および韓国人学生の葛藤の原因帰属と解決方略」『心理学研究』74(6),531-539.
- 加賀美常美代 (2006)「教育的介入は多文化理解態度にどのように効果があるか - シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合 -」『異文化間教育』24,76-91
- 加賀美常美代 (2013)『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているか 韓国・台湾における歴史・文化・生活にみる日本イメージ』明石書店.
- 加賀美常美代・守谷智美・朴エスター・岡村佳代・村越彩 (2013)「奈良世界遺産による異文化理解プログラムの成果と教育プログラム開発」加賀美常美代編『アジア諸国の子ども・若者は日本をどのようにみているか 韓国・台湾における歴史・文化・生活にみる日本イメージ』181-201, 明石書店.
- 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃 (2014)「韓国における 20 代の日本語上級話者の日本イメージ」『人文科学研究』10, 69-82.
- 加賀美常美代・朴エスター・岡村佳代・小松翠「韓国人の年代ごとの日本イメージとその関連要因 — 国民意識と日本への関心を中心に —」『日語日文学研究』94 (2), 95-124.
- 加賀美常美代・黄美蘭・小松翠 (2016)「台湾人の年代ごとの日本イメージと規定要因 — 国民意識と日本関連情報との接触頻度に着目して —」『異文化間教育学会』44, 98-115.
- Kang,T.S. (1974)A foreign student group as an ethnic community. International review of modern sociology : journal of cross-national,cross-cultural and interdisciplinary research.36,72-82.
- 川喜田二郎 (1986)「KJ 法 渾沌をして語らしめる」中央公論社.
- Klein,M.H , Miller,M.H. & Alexander,A.A. (1981) 16.The American Experience of the Chinese Student: On Being Normal in an Abnormal World. Arthur Kleinman and Tsung-yi edited Lin.Normal and abnormal behavior in Chinese culture.311-330.
- 小松翠 (2012)「中国人留学生の友人関係に関する体験の否定的認識と友人関係への不満、原因帰属の関連について」『人間文化創成科学論叢』15,83-91.
- 小松翠 (2013a)「中国人留学生の友人関係に関する体験の否定的認識と友人関係への不満、原因帰属の関連について」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』15, 83-91.
- 小松翠 (2013b)「中国人女子留学生の友人形成および友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』12,71-86.
- 小松翠 (2015)「留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験とはどのようなものか：多文化交流会 3 か月後のインタビューから」『お茶の水女子大学人文科学研究』11,165-179.
- 小松翠 (2016)「世界の留学生交流の現状と動向：アメリカと中国を中心に」『お茶の水女子大学人文科学研究』12,165-176.
- 黄美蘭 (2013)「アルバイト先における被差別感の原因帰属と間接的接触との関連—中国人日本語学校生の場合—」『異文化間教育』37,101-115.
- 黄美蘭・小松翠・加賀美常美代 (2014)「中国人留学生の領土問題に関する日本イメージ」加賀美常美代代表『平成 24 年度 -27 年度科学研究費成果報告書』73-92.
- 葛文綺 (2007)「中国人留学生・研修生の異文化適応」溪水社.
- 林紋守 (2008)「台湾人大学生が日本人に対して持つイメージ：異文化接触の形態による影響の違い」『言語・地域文化研究』14, 211-255.
- Menzies.J.L. & Baron.R. (2014) Internatonal

- postgraduate student transition experiences:the importance of student societies and friends. *Innovations in Education and Teaching International*.51(1),84-94.
- 御堂岡潔(1992)「12章 文化の理解 第3節 文化の理解文化集団のイメージ-マス・レベルにおける文化理解」267-285.
- Miller, D. T., & Ross, M. (1975). Self-serving biases in the attribution of causality. Fact or fiction? *Psychological Bulletin*, 82, 213-225.
- 宮脇弘幸・姚国利(2005)「中国人の対日観に関する調査」『人文社会科学論叢』14,17-40.
- 中野はるみ(2006)「異文化教育における留学生の役割」『長崎国際大学論叢』6,55-64.
- 中沢和子(1979)「イメージの誕生 0歳からの行動観察」日本放送出版協会.
- 日本学生支援機構(2016)「平成27年度外国人留学生在籍状況調査結果」http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/10/20/data14.pdf (最終閲覧日:2016年12月31日).
- Pavel,S. (2006) Interaction Between International and American College Students:An Exploratory Study.*Mind Matters:The Wesleyan Journal of Psychology*.1,39-55.
- Pettigrew, T. F. (1979)The Ultimate Attribution Error: Extending Allport's Cognitive Analysis of Prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*. 5,461-476.
- 蘭千寿・外山みどり(1991)『帰属過程の心理学』ナカニシヤ出版.
- 李洋陽(2005)「中国人留学生の日本人イメージとその形成過程-マスメディアと直接接触の影響を中心に-」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』68,211-244.
- Ross, L.D.(1977)The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process, *Advances in experimental social psychology*. 10,174-221.
- 劉志明(1998)「中国のマスメディアと日本イメージ」エピック.
- 佐々木由美(1996)「3章 日・中・韓3文化の日本人観とイメージ・ギャップ 3.3文化間でのイメージ・ギャップ」見城武秀・橋元良明・堀誉子美・小川葉子・小田切由香子・土井みつる・岡野一郎・笹川洋子・佐々木由美・松田美佐・辻大介・福田充・森康俊・北田曉大「中国人留学生・韓国留学生・日本人学生のもつ<日本人イメージ>較-イメージおよびメタ・イメージにおけるギャップを中心に」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』8,235-257.
- 戦旭風(2007)「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』12,95-105.
- 柴田有喬(2009)「留学生が認知する日本人学生との対人関係形成阻害要因-留学生の書いた作文からの考察-」『言語と交流』12,18-27.
- 園田智子(2011)「短期交換留学生の異文化適応に関する調査報告-主観的適応感と関連要因を探る-」『留学生交流・指導研究』14,75-85.
- 高井次郎(1994)「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8,106-117.
- Tajfel,H. & Billig,M. (1974) Familiarity and categorization in intergroup behavior.*Journal of Experimental Social Psychology*. 10,159-170.
- 譚紅艷・渡邊勉・今野裕介(2011)「在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望」『目白大学心理学研究』7,95-114.
- Ting-Toomey, S. (1998)Intercultural conflict styles. In. Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Theories in Intercultural Communication*. Newbury Park, CA : Sage.
- 田中詩子・岡村 郁子・加賀美常美代(2015)「日本における台湾出身者の日本イメージ-日本語上級話者を対象に-」『お茶の水女子大学人文科学研究』11,27-41.
- 田中共子(1998)「在日留学生の異文化適応-ソーシャル・サポート・ネットワーク研究の視点から-」『教育心理学年報』37, 143-152.
- 鄭玉善(2008)「中国人留学生の来日前の対日観調査報告とその要因考察-名古屋大学在学中の中国人留学生への調査に基づいて-」『名古屋大学留学生センター紀要』6,5-16.
- Trice, A. & Elliot, J. (1993) Japanese students in America: II .College friendship patterns.*Journal of Instructional Psychology*.20(3),262-264.
- 上原麻子(1988)「留学生の異文化適応」『言語習得および異文化適応の理論的・実践的研究』3,111-124.
- Ying,Yu-Wen (2002) Formation of cross-cultural relationship of Taiwanese international students in the United States.*Journal of community psychology*.30(1),45-55.
- 横田雅弘・田中共子(1992)「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク-居住形態(留学生会館・寮・アパート)による比較-」『学生相談研究』13, 1-8.
- 楊霜・橋元良明(2010)「中国におけるメディアの多元化と日本人イメージの変化-その変化に内在する「人間本位」意識のあり方を中心に-」『東京大学大学院情

付録

「友人関係不満の原因帰属」因子分析の結果（小松, 2013a）

	F1	F2	F3
第1因子 社会的外的要因($\alpha=.852$)			
たまたまそうであったから	0.877	-0.055	0.031
文化が違うから	0.792	-0.080	-0.097
周囲の環境が良くないから	0.773	0.085	0.068
第2因子 人的内的要因($\alpha=.823$)			
自分が努力しなかったから	0.103	0.730	0.110
自分が積極的ではなかったから	-0.160	0.654	-0.014
第3因子 人的外的要因($\alpha=.819$)			
相手が積極的ではなかったから	-0.064	0.072	0.733
相手の自分に対する態度が良くないから	-0.046	-0.329	0.481
相手が努力しなかったから	0.134	0.153	0.421
因子相関行列	I	II	III
I	—	-0.044	0.088
II		—	0.057
III			—

2017年2月26日 受稿

2017年5月1日 受理